

農業・農民への支援活動再考 - シリアと日本の比較をとおして

第3回：試験研究とその普及～なぜ試験研究は現場ニーズと乖離するのか？

農業・農民支援活動の一つとして、農業試験研究の実施及びその成果の活用や普及は、農業普及事業とあいまって農業生産の増大や生産性の向上、農業経営及び農村生活改善等の面で、日本のみならず多くの国々で大きな役割を果たしてきた。言うまでもなく試験研究と普及の連携は、試験研究の成果をエンドユーザーである農家へ伝えたり、現場農家の抱える問題点を研究機関へ送って問題解決を図ったり、新たな試験研究テーマにつなげたりするという点から非常に必要かつ重要である。

最近の日本における一つの動きとしては、普及事業と試験研究、農業者研修教育の3者の機能を一体化した総合センター型組織に代表されるように、形の上では普及と試験研究の連携や一体化が進んできている。こうした動きの背景には、普及事業が縮小化の方向に向かっているという状況もあるが、一方では試験研究と普及の連携の必要性が叫ばれていながらも、実際には必ずしもあまりうまくいっていないということもある。日本の農業普及の歴史を振り返ってみると、以前は作物増収をめざした優良品種の普及などの比較的「単純な」普及活動が主流であったが、最近では農家のあり方や要望も多様化してきており、それに伴って普及活動も高度化、多様化する必要に迫られてきている。一方、農学の進歩に応じて、試験研究テーマも高度化・細分化されてきており、その反面で必ずしも多様化した農家のニーズにこたえきれない場合もある。さらに研究予算面からの制約もあり、そのために現場からの要望すべてには対応できないということもあるし、予算を獲得するために必ずしも現場ニーズに基づかない、予算決定権者を説得しやすいテーマの元に予算要求されるということもある。

一方、シリアにおいても試験研究と現場ニーズとの乖離は大きな問題となっている。たとえば、灌漑関連の試験研究を見てみると、シリアのブドウ栽培の場合では棚にラテラル管を這わせて、そこからスパゲッティと呼ばれるチューブを樹の根本近くまで垂らして灌漑するのが農家の一般的なやり方であるが、灌漑試験場ではドリップラインを地上に設置して灌水試験等を行っている。灌漑方法が異なるので、このままでは試験結果を農家に普及することは期待できず、試験場は農家のやり方も取り入れて比較する等の試験を行う必要がある。また、野菜栽培が非常に盛んな地域にある灌漑試験場であるのに、野菜を対象とした試験がほとんど行われていないという事例もある。さらに、果樹の場合は灌漑方法を従来の水盤灌漑からドリップ等の節水灌漑に変更する場合、両者の土壌中の湿潤域(wetting pattern)の違い等から、変更直後は減収する場合があります、そのための対策は農家にとって非常に重要であるが、灌漑試験場でそうした試験研究は実施されていない。

このように試験研究が農家のニーズに応えていないことの原因としては、研究者が生産現場に出かけて行く機会が非常に少なく、現場が直面している問題を知らないことがあげられる。試験研究と現場農家をつなぐのは普及の重要な役割の一つであるが、シリアでは最近になって研究者と普及員をつなぐ橋渡しとして専門技術員(SMS: Subject Matter Specialist)の設置が将来像として模索されている。これは前回号で見たとおり一見日本における潮流とは反対方向の改革のように見える。シリアではまだまだ普及員の基礎能力が低いとみられており、その底上げが中長期的課題としてあげられること。また、短期的にはSMSを地域拠点に置き、普及員のもっとも身近な相談相手として、また技術面を補完するご意見番としての役割をSMSに求めていることがシリアの事情としてあげられる。さらに理想を言えばSMSは農民の抱えるさまざまな問題に関して普及員を通してつかみ研究者側につたえる点でも重要な役割を果たさなければならない。試験機関の研究者はSMSから現場の問題を知ることができ、それを研究のタネとしていくことが期待されている。



シリアのブドウ栽培の様子



農家の灌漑実態の一例



きれいに整備されている灌漑試験場